



私の歌った初演曲（第2回）

内田 るり子

上野の音楽学校（現芸大）を卒業した頃は、日本は大東亜戦争の渦の中に巻き込まれていた。学校でヘッセルト先生にお習いしたドイツリードなどは殆ど歌うチャンスもなく、私はNHKの放送で、国民歌謡と名付けられた、「やしの実」などの日本歌曲を専ら歌っていた。

その頃、私は平井康三郎先生のお宅と隣組が一緒に、奥様と防空演習を御一緒にしたりして親しくさせていただき、先生にハーモニーを教えていただいていた。先生は「日本歌曲集」を世に出されて、有名な、「平城山」や「九十九里浜」「秘唱」などで、天才作曲家として注目をあびていられる頃であった。色の白いやせた美男子で、三十過ぎて間もない位でいらしたと思うが大人の風貌であった。先生は私をとっても可愛がって下さって、ハーモニーのレッスンを終ると、御自分が新しく作曲中の「日本の笛」の中の「あの子この子」などもってこられては、私に歌わせて、ああでもない、こうでもないと言われては、御自身で見事なテノールで、日本の味たっぷりに自作を歌って下さった。私は先生から、その時に日本の歌手は、日本の歌を上手に歌えなければならない。日本の歌手が世界の檜舞台で日本の作曲家の作品を歌うことこそ最も芸術家として栄光ある仕事だと云うことを強調されたのをうかがった。私はこの頃から自分のライフワークを、日本歌曲をつとめて演奏紹介する道をとろうと心に決める様になっていた。

1947年、平井康三郎先生は、「日本の笛」につづく「日本の花」という一連の歌曲集の新作発表会に私を使って下さった。たしか、畑中更子さんと、伊藤武雄先生が御一緒だったと思う。私には栄光ある初演の機会であった。

その翌年、私は日本歌曲のみで、デビューリサイタルを開き成功した。その時には平井先生が与謝野品子の「みだれ髪」の中から、初演曲をかきおろして下さった。それからNHKのラジオ歌謡などで平井先生の曲

をよく初演した。「春のとびら」などは美しくヒットしたものであった。

リサイタルと同年1948年に、私は毎日コンクールの本選会で別宮貞雄氏の「淡彩抄」を初演することになった。当時別宮さんは東大の学生でつめえりの服をきていられた。「淡彩抄」は美しい作品であった。伴奏の安部和子さんと、この作品の洗練された新しい音の感覚に魅せられて夢中になってすいつけられる様に勉強した自分の心と姿が、今でも青春の美しい追憶と共に、まざまざと思い出される。

その結果、この作品は一等に入賞した。勿論作品が一等だったのであるが、演奏がととても良かったとの大方の批評をいただき、初演者の幸福を心の底から味わったものである。

次の印象的な初演は1950年、当期中堅の、手堅い作曲家——平尾貴四男、高田三郎、安部幸昭、貴島清彦氏等のグループ地人会で、高田三郎氏の「立原道造の詩による四つの歌曲」の初演をした時である。四楽章から成るこの歌曲は、今も若い歌手に愛唱されているが、重厚で充実した作品であった。

作曲家高田氏の、一音符たりともゆるがせにしない厳しい作曲態度が反映して、演奏にも一しほの神経のつかい方と緊張が感じられた。しかし仕上がったものはロマンチックで美しさに溢れている。この初演の演奏会の歌の興奮と快感が、この楽譜を手にするたびにいつも新しく溢れ出して来る。

1955年は、私にとって初演曲の爽りの多い時であった。先づ3月に、私は団伊玖磨氏の「夕鶴」につく創作オペラ「ききみみづきん」の初演にあたり老婆の役を与えられた。団さんとは前から、親しくさせていただき「五つの断章」「我が歌」「美濃びとに」等リサイタルで歌ったり、ラジオ歌謡の「落葉松に夕日はうつり」と云うのや、芸術祭の「美しいくもの歌」と云うのを私の為

に書きおろして下さったりしていた。「ききみみづきん」の老婆も団さんが、私を名ざして下さった由であった。演出の岡倉士朗氏もすばらしい方で、オペラ経験の少い私にとって、この初演は生涯での尊い忘れることの出来ない思い出である。

団氏はこのあと1958年に、私の為に「三つの小唄」という日本情緒豊かな歌曲集をかいて下さり、コンサートの声楽発表会で初演させていただいた。今は団さんとはお会いすることも少なくなってしまったが、時折随筆などを拝見して、当時いろいろ親切にお世話して下さいた事をとても有難くかつかしく思い出している。

1955年がみのり多い年だと云ったのは「ききみみづきん」の初演の他、第四回日本歌曲独唱会で、深井史朗氏の「蛙・祈りの歌」の改作初演、三善晃氏の「萩原朔太郎の詩による三つの沿海のうた」の書き下し、伊藤隆太氏の民謡組曲「最上川」の書き下し、間宮芳生氏の「日本民謡集」第一集の書き下しをいづれも初演したことである。一晩の独唱会でよくもまあこんなに初演をしたものだ、今ふり返っておどろきあきれている。三善晃氏は、まだ東大を卒業されたばかりであったが、その音の感性の豊かさとは既に異常なまでのひらめきを感じさせられた。伊藤隆太氏のは当時山形大学を教えていた私が現地で素材を収集提供したものである。

この中で、特に私が書き残したいのは間宮芳生氏と私の協力による「日本民謡」の作曲の仕事で1953年頃から今日に至ってもまだ続けられているものである。

まだ24才位の青年作曲家であった間宮氏と30を過ぎたばかりの歌手であった私は、「日本の民謡」というものに対する異常な愛着の点で芸術家としての共感をもった様に思う。当時NHK資料課の御好意で、日本の民謡のレコードを日曜毎に新橋のNHKに通ってはしらみつぶしと一緒にきいた。間宮氏はお若かったけれど、民謡に対する、そして音楽に対する感はずどくすばらしく、一緒にきいている私の何倍もよく理解され、記憶され、すべてにインスピレーションをとられた。そして二人で、民謡の曲を一つ一つ作品になるものかどうか検討して◎や○をつけて、将来ステージにのせることを約した。

その後今日に至る迄、私の独唱会毎に七回にわたり、三十一曲が作曲初演され、NHKのライブラリーでの夢を実現して来ている。

ウィーンの私の独唱会では、特に間宮氏のこれ等の民謡の作品は高く評価され、賞讃された。この仕事を私は、生涯のライフワークで最も大切にしたいと考えている。

1956年頃から、作曲家と詩人のグループ、「蜂の会」が生れた、主な詩人は、北川冬彦、深見須磨子の二人で、作曲家は、深井史朗、高田三郎、宅孝二、山田和男、氏等多彩であった。私は古沢淑子女史と共に歌手として

この仕事に加わった。この会は、新しい作詩に、新しい曲をつけて初演するのである。

私はこの会で、山田和男氏の「蜂のうた」「遙かな花」や、宅孝二氏の「猫の蚤」最近では石田一郎氏の大福帳より等のユニークな作品をはじめ、その他にも数々の作品を初演した。

特にこの会で一番おつき合いの深かったのは宅孝二氏である。宅氏はリファインされたフランス的な天才的なひらめきをもった、日本には得難い音楽家であると思う。彼の伴奏で彼の作品を初演することは私の大きな楽しみであった。

宅孝二氏と、野上彰氏と、私と三人でしたジョイントリサイタルは、両氏の作詩作曲による「女の一生」の初演と共に、本当に芸術家の魂の燃焼したすばらしい思い出である。今は亡き野上氏の暖いまなざしを私は、真実の光と共に思い出す。

「蜂の会」における深井史朗氏との出会いも、私に芸術家としての深い魂と抱擁とを与えられた。「日本の笛」をソプラノ用から、私の為に、アルト用として、ピッコロ、フルート、バスフルートのもちかえに編作していただいたり、前記蛙・祈りの歌をバリトンからアルト用に改作していただいたりして初演し、最後に、私の為に「四つの日本民謡」を書き下して下さった。「田草取唄」「船頭唄」「田植唄」「盆踊唄」の日本民謡からの原曲の生命を生かした作曲は、1957年、私の独唱会に於て、間宮芳生氏のピアノで初演された。そしてこれが、私のしる限りでは、深井氏の遺作になった様である。

これ等の作品の他に、私はまだいくつもの日本歌曲を初演した。それ等の中で、特に印象の深いものは、1966年に初演した、貴島清彦氏の、雅楽を主材として作曲された、朗詠「嘉辰」、催馬楽「伊勢の海」、昨年1969年に作曲された、助川敏弥氏の「宮沢賢治の詩による四つの歌曲」である。助川氏の成熟したこの作品は、アルトの声の効果をよくこころえ生かした秀作で、若い声楽家におすすみたいものである。貴島氏のは、雅楽への造詩なしでは、本当の演奏の光はもたらせない。

以上、私の初演曲への回想は、その作曲家への回想とむすびついて、ゆたかな思い出を繰広げ、将来への果てしない夢と希望をもたらす。

間宮氏との民謡のむすびつき以来、私の心はますます民族的な歌曲のとりことなっていた。果ては、生命の半分を民謡の研究にまで投じる様になった昨今の私ではあるが、声楽家としての生命の灯のきえる日まで、私は初志の日本の歌の演奏・紹介・初演の道を貫き進んでゆきたいと思う。

(完) 1970.8.9. 東京

